

「パーデレ」は司祭、「イルマン」は修道士のこ
とである。フランシスコ・カブラル司祭はこの当時、
日本でのキリスト教布教を推し進めていた、イエズ
ス会の二代目日本地区布教長であった。

カブラルは偏頭痛の持病があつたらしい。この時
の旅は、前年の九月に肥前口ノ津を出発し、豊後
府内でキリシタン大名の大友宗麟に会つた後、さら
に博多・下関・山口・石見津和野を経て安芸に入っ
ているのだが、ここで寝込んでしまい、一ヶ月近く
も逗留している。その後、芸予諸島の島伝いに、今治
を経て塩飽に着いたわけだが、その船旅の間、ずつ
と頭痛と発熱を抱えていたとしたら、かなりしんど
い旅であつたらう。不機嫌になるのも仕方がないと、
ジョアンは思っていた。

「まったく、この国の船ときたらよう揺れてかなわ
ぬ。ようもあのような小さい船で、ゆるゆると島を
渡っていくものだ。おまけに狭い船底に押し込めら
れて、商人も農民もわからぬ者どもと並んで寝てお
らねばならぬ。頭が痛うなるのも道理というもの
よ」

カブラルはなおもぶつぶつと文句をつらねていた
が、それで頭痛を紛らわしているのかもしれないなかつ
た。

ジョアンは黙っておとなしくそれを聞いている。

潮の流れの複雑な瀬戸の島々を渡るのには、小回りの効く小船の方が良いのだとはわかっていても反論はしない。海洋国家ポルトガルの旧家出身で、軍人からイエズス会に入信したカブラルには、日本の海運など理解のしようがないだろうし、そこまで細かい事情が説明できるほど、自分のポルトガル語に自信があるわけでもなかった。

「イルマン・ジョアン、私のこの頭痛はいつ治まるやわからぬ。長逗留になるやもしれぬが、宿の者とのやり取りはすべてそなたにまかせるゆえ、宿の者はこの部屋に入れるでないぞ。食事も、持参の干し肉があるゆえ運ばずともよい。言葉もわからぬのだから、私にはかまわぬでよいと言っておけ」

「はい、心得ております」

カブラルの言葉に、ジョアンはうなずく。

「うむ。そなたが同行してくれて、誠に助かる。そなたの通辞（通訳）が無ければ、我々だけでは何もわからぬでの」

そう思うなら、少しは日本語を覚えればよいとジョアンは思うのだが、カブラルは来日して三年にもなるというのに、いつさい日本語を覚えようとはせず、また日本人にラテン語やポルトガル語を教えようともしなかった。ジョアンがポルトガル語を話せるのは、カブラルの前任の日本布教長、コスメ・デ・

トルレス神父に育てられたからである。

ジョアンは天文十九年（一五五〇年）、山口で生まれ、生後八日目にトルレスから洗礼を受けた。キリシタンだった父母の名はわからない。その頃、山口は領主の大友義長の庇護の元、イエズス会の布教が盛んで、日本初の教会とされる大道寺が作られるなど、キリシタンの拠点となっていた。

しかし弘治二年（一五五六年）、山口は毛利元就によつて攻め滅ぼされ、トルレスらは大友宗麟の治める豊後府内に本拠を移し、ジョアンもこれに従った。そしてトルレスの養子となつてジョアン・デ・トルレスと名乗り、ポルトガル語とキリスト教の教理を学んだのである。

「おおそうだ、そなた、私の回復を待っている間に、ここで説教をせよ」

「ここで、でございいますか？」

カブラルの言葉に、ジョアンは驚いて聞き返した。「ここは船宿でございいます。船頭や水主もせわしく行き来いたしますし、そう泊まり客もおらぬようです。ので、聞く者がおりますかどうか」

「なに、かまわぬ。一人でも一人でも入信する者がおればよいのだ。それにあちこちを渡る船頭なれば、人づてに話が広がることもある。それに、そなたの説教はようできておる。日本人イルマンの中で、

領主や学者に対してでも説教をなし得るほど教理の理解の深い者は、そうはおらぬでの」

それは皮肉でも何でもなく、ジョアンに対するカブラルの評価であった。

「なんや、パーデレさんが来られとるてな」

客の出入りが一通り落ち着いて、奥の間へ入っていったたえに、帳簿を見ていた当主の東次郎が声をかけた。東次郎は船乗り上がりらしくよく日に焼け、額のあたりがかなり薄くなつてはいるものの、まだまだ覇気を感じさせる四十過ぎの壮年である。

「へえ、カブラルさんとジョアンさん言うとったかいな。ジョアンさんいう若い人の方は、山口の生まれや言うとりましたよ。パーデレさんにも日本の方がおるんやねえ」

「そらそうや。豊後や肥前の方には天主教の南蛮寺がぎようさん出来とつて、殿さん方が進んで領民を信者にしよるいうさかい、パーデレさんも日本人を雇わな足りんのやろ」

イエズス会による日本布教の初期には、教理の基本となる創造神デウスを「天主」「天道」などと訳して伝えていた。そのためキリスト教は「天主教」と呼ばれ、天竺のさらに向こうから来た仏教の一派と捉えられていた。教会を「南蛮寺」と呼んでいた

のもその現れである。庶民はざつくりと宣教師を「パーデレさん」と呼んでおり、仏教の僧侶と同じように考えていたようだ。

「パーデレさん、どこ行くて？」

「今治から来て、堺のほう行くて、船頭のさへえさんが言いよりましたわ」

たえの言葉に、東次郎はうなずいて、

「パーデレさんは堺や京に行きたがるな。前に来たパーデレさんもそうやったわ。そうや、ぬしがここへ来る前だったか、フロイスさんいうパーデレさんが来られてな、なかなか堺行く船が見つからなで難儀しとったことがあつたなあ」

永禄七年（一五六四年）、宣教師ルイス・フロイスが、アルメイダら他の宣教師と共に堺に行く途中、塩飽に寄港したのが、キリシタン関連の文献の中で塩飽が登場する初見とされている。この時、フロイスは伊予の堀江から塩飽に寄り、堺行きの船を待ったが、折悪しく船便が来ず、赤穂の坂越まで小船で渡つて十二日間待った後、堺行きの船を見つけたと、イエズス会本部宛の書簡に記している。その後、宣教師たちは堺と豊後を往来する際に、何度か塩飽を経由していた。

「お前さま、なんでパーデレさん方は豊後や山口から安芸へ行かんで、こつちへ回つてくるのやろ？」

「なんやら、安芸の毛利さまは天主教がお嫌いなんやと。そやさかい、安芸にはパーデレさん方は入れんで、能島からこつちへ回って、また播磨の方へ行くらしいわ。豊後の殿さんの大友さまは、能島の村上さまと仲がええさかい、何かと安心なんやろ」

能島村上衆は、伊予大島の能島城に本拠を置く村上水軍の一派であり、この頃の塩飽諸島もその支配下にあつて、村上氏が塩飽の代官を務めていた。村上水軍は本来、安芸の毛利氏についていたが、能島村上氏の統領の村上武吉は、その裏で豊後の大友氏や阿波の三好氏とも通じていた。元亀元年（一五七〇年）には、豊後の大友宗麟が村上武吉に對し、家臣団が堺へ向かう際に、塩飽を無事に通過できるよう依頼する文書を送っている。イエズス会宣教師も、これと同じ待遇で、通行の安全を保障されていったようだ。

「嫌いな殿さんもおるし、その大友さまみたいに広めようとする殿さんもおる天主教で、どんなもんやろね」

ふうんと、たえは考え込んだ。東次郎は帳簿をめぐりながら、あまり気が無さそうに

「パーデレさんが泊まられても、言葉がわからんさかい、話したことないけどな。そら仏さんにもいろんな宗派があるさかい、好き嫌いもあるやろ。けど

まあ、お伊勢さんかて阿弥陀さんかて、どれでもそ
ない変われへんで。死んでしもたらそれで終いや」
「そうやねえ」

もともと東次郎はあまり信心深いほうではない。
世は下克上の戦がうち続き、領主が次々と滅ぼされ
て支配者が変わる。現に塩飽も、讃岐守護代の香西
氏から能島村上氏へと支配者が移り替わり、いつま
た変わるかわからない。そして、いつ庶民の暮らし
が安穩になるかは誰にもわからない。

そんな世の中で、頼れるのは清く正しく身を律す
る小難しい哲学ではなく、船を遭難から守ってくれ
る呪文や、手取り早く金が儲かる方策なのだ。そ
の「現世利益」を求める感覚は、戦に倦み疲れた庶民
に共通のものであった。

「仏さん信心してもなあ、どうせうちらみたいなお
なごは極楽に行かれへんのやし」

たえは播磨の生まれで、商家に嫁いだものの、戦乱
で親も夫も失い、人買いに売られた女である。三年
ほど前に「円や」に雇われたが、器量がよいことに
加え、計算ができて気働きが効くことを東次郎が目
にとめ、数年前に先の女房を病で亡くしていたこと
から、後添えに入れたのである。

今「円や」にいる女たちも、それほど境遇は変わ
らない。行く先も食いぶちのあても無いなら、遊女

でもずっとまじだという者も多くいるのだ。

そういう女たちだから、神仏になど救いを求めない。ただ、たえはパーデレなる人物に近く接したのは初めてだったので、それなりに気にはなっている。何より、山口生まれと言うにも関わらず、異国風の名を名乗っている若いジョアンが不思議だった。

「天主教の法名にしたら、なんか御利益あるんやろか？」

キリシタンに対するたえの興味はまず、その程度のものであった。